

文芸を介した連帯

現代日本における「読書会」の展開

安川和貴

本稿の目的は、J. ハーバーマスの『公共性の構造転換』において「文芸的公共性」として示唆された、文芸作品についての討議と公共性を関連づける議論を再考し、特定の本を複数人で読む活動である「読書会」の現代的な展開を考察することで、流動化や個人化などによって特徴づけられる「後期近代」における「読書がもつ連帯の可能性」について検討することである。

近年、インターネット利用や SNS の普及と連動するように、「読書会」と呼ばれる、複数人で特定の本を語り合う活動がおこなわれている。2015 年 1 月に『週刊エコノミスト』で組まれた特集「読書会ブームが来た！」では、「クローズドな知識集積の場だった読書会がよりオープンになり、参加者はその時に選ばれた一冊の本やテーマによって自由に参加したりしなかったり」できることが、近年「ブーム」となっている読書会の特徴だと紹介されている（北條ほか 2015: 52）。このような読書会が、本稿における分析対象である。

現代日本における読書会の新たな展開に着目する意義は、主に次の二点に要約できる。

一つめは、現代の読書会を文学社会学における「新たな対象」として位置づけられる点である。読書は一般的に孤独な行為であると考えられ、文芸作品やその読書の社会的側面について分析を試みる文学社会学においても、読書行為それ自体は「すぐれて孤独な仕事」（Escarpit 1958=1959: 142）であるとされてきた。しかし、近年注目される「文学社会学の『新たな対象』」（Sapiro 2014=2017: 159）として文学フェスティバルなどが紹介されるように、「きわめて孤独な文化的実践である今日の読書のあり方を考えてみれば、ちぐはぐなものに見えるかもしれない」と評される、読書にまつわる集団的な活動が文学社会学において新たに分析の対象となっている状況がある（Sapiro 2014=2017: 159）。したがって、近年新たな展開をみせている読書会をとりあげることで、現代日本における新たな読書実践の様相を浮かびあがらせる契機とする。

二つめは、読書会の分析を通じて、今日における「文芸的公共性」のあり方について考察することができる点である。文芸作品について語り合う場である読書会を分析することを通じて、ハーバーマスの「文芸的公共性」概念を再検討し、孤独な行為とされる読書が、読書会という形で連帯を形成する構図を考察する。その際、読書会という形で現れる「文芸を介した連帯」を「公共性」という観点からとらえ、考察していくこととなる。現在、大手出版社や論壇誌によって 1920 - 70 年代に成立した読者共同体である「文芸的公共圏」（吉見 2003: 330）が、「各種の映像メディアや携帯電話、インターネットなどによる新しいコミュニケーションの環境の形成と、出版市場のグローバル化・多メディア化による

読者市場の構造の変化」に伴い、その姿を変容させている（吉見 2004: 129）。その変化のひとつの現れとして、現代の読書会を位置づけ考察することによって、「文芸的公共性」の今日的な様相を描出することができる。

以上の理由から、本稿では、現代日本において新たな展開をみせる読書会を分析対象とし、「文芸を介した連帯」のもつ公共性としての可能性の探求を試みるという立場をとる。とりわけ「文芸を介した連帯」を分析する際の手がかりとしたいのが、孤独／連帯、虚構／現実という一見すると相反するような二重性がいかにして結びつくのかという問いである。つまり、「文芸作品の読書は孤独におこなわれるにもかかわらず、また現実とは異なる虚構の世界を経験するものにもかかわらず、『読書会』という形で現実における連帯をつくりだすのはなぜか」という問いを軸に、本稿の議論は展開していく。

1 章では、現代日本における読書会の新たな展開の様相を確認した。その際、本稿が分析対象とするところの、インターネット利用や SNS の普及と連動する読書会を「現代の読書会」と定義し、それ以前の読書会を「従来の読書会」として、それぞれの読書会の特徴を理念型として整理した。そして、「現代の読書会」を公共性という視点からとらえていくため、ハーバーマスの「文芸的公共性」概念を再検討し、とりわけハーバーマスの議論が「私的なものの最奥庭」における「単に人間的なもの」であるという自己理解にもとづく主体性が、文芸作品を媒介にして「公衆への関わり」をもつことを指摘する点で、「読書会」の分析に重要な示唆を与えることを確認した（Habermas 1962=1973: 70）。それは、いうなれば、きわめて私的な経験を通して、日常生活において表出することのないような「孤独」な経験を通して、他者と関わるという関係のあり方である。

しかし、ハーバーマスの議論は「現代の読書会」の分析において三つの問題点をもつ。一つは、「私的なものの最奥庭」である内面性に着目する一方、読者間に存在する差異を考察することはなく、それらを「はじめから公衆への関わり」をもつものとして、あるいは「単に人間的なもの」として短絡的に処理してしまう点である。二つめは、ハーバーマスの議論には「理性の中心化と感性の周辺化」という偏りがある点である（阿部 1998: 194）。これは、ナチスによる政治の芸術化（劇場、レトリック、物語、祝祭、虚飾の政治領域への侵入）への対抗というハーバーマスの思想的・政治的な立場に由来するものだが、「文芸を介した連帯」を考察するためには、虚構の物語の果たす役割をより詳細に分析していくことが不可欠である（阿部 1998: 195）。最後に、「現代の読書会」を分析対象とする本稿では、マルチ・メディア社会として捉えられる現代社会という時代的背景をふまえ、「文芸を介した連帯」を考察する必要がある。そのため、18 世紀におけるヨーロッパ社会の分析を通じて導き出された「文芸的公共性」概念を援用し考察することにくわえて、現代社会におけるメディアや文化の変容を考慮に入れたうえでの分析をおこなわなければならない。この点については、Z. バウマン（Bauman 2000=2001）の「クローク型共同体」を理論枠組みとして、「現代の読書会」をとらえていく。

以上でみてきたように、1 章ではハーバーマスの提起した「文芸的公共性」概念を、「現代の読書会」を分析するなかで主に三つの点から再検討していくことが、本稿における論旨となることを確認した。そして、これらの観点は、孤独／連帯、虚構／現実という一見すると相反するような二重性がいかにして結びつくのかという問いと密接にかかわっているのである。

2章では、孤独／連帯、虚構／現実という構図の前提となる、読書を孤独な行為や現実逃避としてみなす傾向について文学社会学や読書行為に着目した先行研究を用いて確認した。しかし、文学社会学という学問領域はときに「アメーバ」（Griswold 1993: 455）に喩えられる、曖昧とした領域である。そのため、海外における文学社会学の動向についてはフランスの文学社会学者である G. サピロ（Sapiro 2014=2017）の『文学社会学とはなにか』を、日本における文学社会学の状況については『文学社会学とはなにか』の訳者の一人である、松下優一（2017）による「訳者解説」における整理を参照した。そのなかで、文学社会学においては「読書は言葉に表されることのない孤独な経験であり、諸個人がそれについて話してくれない限り、対象化するのは難しく、一種の『ブラックボックス』」であるとしてアプローチの難しい対象とされてきたことをみた（Sapiro 2014=2017: 161）。しかし、先述したように、文学フェスティバルの登場など、近年、目に見える形での読書行為として集団的な読書活動が注目され、文学社会学における読者研究に新たな流れをつくりはじめている状況がある。そして本稿の議論は、このような文学社会学における近年の流れに位置づくものであることを確認した。

読書が「言葉に表されることのない孤独な経験」とであると文学社会学において考えられてきたことはみたが、このような読書行為の形態は、近代以降に普及したものである。したがって、前田愛（[1973] 2001）の読者研究を起点として「音読から黙読へ」と読書のあり方が変遷していく様子を分析した諸研究を概観し、読書が一人で黙って読むという孤独な行為へと形成されていく過程をみた。その際、歴史社会学の研究として近代的な読書の成立をみつかった佐藤健二（1987）や山梨あや（2001, 2011）の研究を参照し、「自己形成における『読む』という行為の持つ意味」（山梨 2001: 71）について考察した。具体的には、明治以降、読書の形態が「音読から黙読へ」移り変わっていく過程に見られた「『読者の主体性』の確立」が「『共同体の解体』というべき事態に関連」していたことを確認した（佐藤 1987: 238）。これについては、教養主義がもつ「農村からの飛翔感」を指摘した竹内洋（2003）や筒井清忠（1995）の議論などにも依拠して、孤独な行為としての読書について考察を試みた。

そして、かつて雑誌メディアを中心として形成されていた「文芸的公共圏」が、「各種の映像メディアや携帯電話、インターネットなどによる新しいコミュニケーションの環境の形成と、出版市場のグローバル化・多メディア化による読者市場の構造の変化」に伴い、現在その姿を変容させているという吉見俊哉の指摘から、読書における孤独が現代社会において一層深まっている事態を確認した（吉見 2004: 129）。この点については、北田暁大・解体研（2017）による現代日本における文化消費の差異化に着目した研究や、メディアの変容による読書経験の個人化について指摘した池上賢（2018）の論考を手がかりに考察をおこなった。

3章では、「現代の読書会」の展開過程と、それがもつ現代的な様相について確認した。近代以降、孤独な行為として制度化され、さらに現代社会においてはその傾向が一層強まる読書であるが、そのような状況のなかで「現代の読書会」がいかんして発展してきたのか、その歴史的な経緯と「現代の読書会」の諸特徴を分析した。

当然のことながら、読書会は読書の能力や傾向と大きな関わりをもっており、学校教育や図書館に代表される社会教育、そして出版文化の展開が読書会に対しても影響をもたら

している。したがって、その時代の社会的な状況から読書会の様相は考察される必要がある。こうした読書会の変遷と特徴について、とりわけ明治時代から 1980 年代の読書会を「現代の読書会」以前の読書会である「従来の読書会」と位置づけて、これを概観した。

戦前については、配本や読み回しのための読書会、学生による教養主義的な読書会、社会主義などの読書会などをみることができた。そして戦後になると、これらの読書会にくわえ、読書会はとりわけ図書館による社会教育としての位置づけがなされていく。この他には、専門的な知識を必要とする職業に就業する者同士でおこなう専門職の読書会や、単に読んだ本について感想を語り合う娯楽のための読書会などもあった。こうした読書会の数が、読書推進運動協議会のおこなう調査『全国読書グループ総覧』において、ピークに達したとされるのが 1980 年代である。しかし、その後の 2000 年前後は読書会の停滞期となり、「読書会はすでに死語化しつつある」（斎藤 2002: 173）と認識されるに至る。

このような状況のなか「現代の読書会」が 2006 年ごろから登場しはじめ、2010 年前後からその存在が広く周知されるようになった。つまり、80 年代以降の「谷間の時代」を経て、2010 年ごろから読書会は再び活発化した。しかし、今日その数を増加させているのは、地域の図書館や公民館を中心におこなわれている読書会ではなく、インターネットを広報や参加募集の拠点とした読書会である。そして、前者の読書会では現在も高齢化が進み、その数を減少させているのに対し、後者の読書会では若年層が参加する傾向の強い読書会として活況を呈している。

こうした「現代の読書会」が成立し、拡大していく過程とその背景について、①インターネット（SNS・書評・ウェブサイト）、②新聞・雑誌（読書会の推進、「出版不況」）、③「朝活・婚活」の流行、④地域コミュニティへの注目という観点から分析した。その結果、「現代の読書会」は、たとえ各会の目的と関係しない場合でも、多様な文脈のなかに位置づけられることによって 2010 年ごろから展開してきたことを確認することができた。「現代の読書会」の特徴は、①オープンで自由な参加、②さまざまな目的、③流動的なメンバーの三つに整理できるが、「現代の読書会」は多様な文脈をもち成立してきたものであり、ウェブサイトや SNS で参加を募るというオープンで自由な参加ができる点を基礎に、さまざまな目的のもと、流動的なメンバーが集まり、それぞれの文脈が入り乱れる形で発展してきたのである。

そして以上のように発達してきた「現代の読書会」は、①ビジネス書の読書会と、②文学作品の読書会の二つに大きくわけることができることを確認した。「ビジネス書の読書会」では、一人では読むのが難しい本を読むためのある種の「強制力」として、あるいは、他者や実際のビジネスの場面に對し、本から得た知識を表現・実践するための「アウトプット」の場として、一冊の本を複数人で読む読書会が要請されたという側面を確認できた。これに對し、文学の読書は、社会や日常生活からこぼれ落ちてしまう「所在ない自分」を受けいれてくれるものであり、そこにビジネス書とは異なった「文学作品の読書会」の意義があると考えられている。その点で、「文学作品の読書会」は、「家族に“お父さん”と呼ばれる自分、職場で“課長”と呼ばれる自分。そんないつもの役割が、妙に窮屈に感じるときってありますよね。自分に固定された役割から逃げ出して、自分のことを誰も知らない場所に行ってみよう」という願望を充足させる場ともなるのである（山本 2019: 102）。このように「文学作品の読書会」は、勉強会としての側面が強い「ビジネス書の読書会」

に比べ、コミュニティとしての機能を果たすものでもあることを確認した。したがって、「文学作品の読書会」のもつこのような特徴をより詳細に検討することで、「文芸を介した連帯」のもつ公共性としての可能性を探求する。

4章では、「文芸を介した連帯」における孤独／連帯，虚構／現実の二重性を分析するため、A. シュッツの文芸分析の議論を検討することで、「現代の読書会」の分析を試みた。シュッツの文芸分析は、草稿「文芸形式の意味構造」（The Meaning Structure of Literary Art Form）と、那須壽（1995）が考察を試みた「文芸の社会学的諸位相」（Sociological Aspects of Literature）というタイトルを付された手書きのメモ、そして論文「シンボル・現実・社会」において詩に関する考察の部分で展開されている。文芸形式の理念型として「詩」「演劇」「小説」の三つが扱われている前者二つの論考から、本稿の主要な分析対象である「小説」の特徴を明らかにした。

シュッツの多元的現実論と草稿「文芸形式の意味構造」をもとに、「現実」と「フィクション」の関係を考察した吉野ヒロ子（1996）は、この点について、日常生活世界と「小説の世界」におけるコミュニケーションのあり方の違いに着目し、整理している。吉野によると、日常生活世界でのコミュニケーションは「他者の理解と反応に賭けられているものであり、インタラクテヴに文脈が決定されていくもの」であるとされる（吉野1996: 124）。このように「日常生活世界のコミュニケーション」においては、他者からの反応や言語以外の要素によって、解釈はある程度限定されていくこととなる。しかし、対照的に、小説の読書などの「文学的コミュニケーション」では、「無限の解釈の可能性」がその特徴として立ち現れる。つまり、言語以外のコミュニケーションの要素である、表情、声色、身振り、状況や文脈が欠如しており、他者の反応と理解によってインタラクテヴに意味が定まっていくということが「文学的コミュニケーション」では起こりえない。したがって、「小説」においては、それを生み出した作者により物語の筋道は決定されているものの、それに対する「再解釈」は多種多様な読解に開かれているということになる。

それでは、読書会におけるコミュニケーションはいかなるものとなるのであろうか。読書会は「読書」、つまり「文学的コミュニケーション」を経たのちに対面的な状況で感想や意見を交換する活動である。そのため、読書会はここまで整理してきた「日常生活世界」と「文学」におけるコミュニケーションの形態の相違がもっとも際立つ場となる。「文学的コミュニケーション」においては、読者の作品の解釈が、作者の意図したものと同等であると考えられた。そして、作品の解釈は個人によりさまざまであり、読者にとっては唯一の解釈として現れるものも、観察の次元においては「無限の解釈の可能性」が存在することになる。これに対して、「読書会」では他者による作品解釈と直面することになる。ひとりでおこなう読書では小説についての自身の解釈は誰にも修正されることはなかったが、読書会ではそれとは異なる解釈が多数存在することを知ることになる。そしてこの時にはじめて、観察の次元において現れていた「無限の解釈の可能性」について読者が経験的に理解することになる。

小説に「無限の解釈」が存在することへの気づきは、今まで主観に一元的に回収されていた小説の世界を、読み尽くせぬ対象として際立たせる。このような他者との読解の相違によって立ち上がる本における未知な領域への感受性は、主体にとって読解の「対象」であったはずの小説の世界に、ある種の自律性を認めることになる。つまり、読書会におい

て「読むわたし」と「読まれる本」という主客の関係は転倒することになる。小説が「主体」として立ち現われることとなる、「未知」を特徴としたこの立脚点、これを〈謎〉と呼ぶこととする。

まとめると、孤独な読書経験のもつ他者との「共有しえなさ」が〈謎〉を生み出すことによって、読書会の求心力となる。そして同時に、〈謎〉を生み出すこの過程が、他者性への気づきをもたらす契機となると考えられる。つまり、読書会においては、孤独であるということが、その連帯の成立条件なのである。したがって、「文芸作品の読書は孤独におこなわれるにもかかわらず、また現実とは異なる虚構の世界を経験するものにもかかわらず、『読書会』という形で現実における連帯をつくりだすのはなぜか」という問いに対しては、「孤独であるのに連帯するのではなく、孤独であるからこそ連帯する」ということが本稿における答えになる。

以上、「現代の読書会」の展開とその現代的な様相を分析し、シュッツの議論を援用することで、「文芸を介した連帯」における孤独／連帯、虚構／現実の二重性を考察した。最後に、「現代の読書会」における「公共性」についてみていくため、H. アーレントの「現れの空間」に関する議論を参照した。アーレントの議論から明らかになったのは、「『現れの空間』は、私が所有しえないもの、私たちが共有しえないものへの関心によって成立する」ものであり、その点において「現代の読書会」は、それぞれの読者の解釈とそれを生み出したそれぞれのパースペクティブという「共約不可能なもの、一般化不可能なもの」で「美的な尺度によって評価するほかはない」ものによって形成される公共性の空間としてとらえることができるということである（齋藤 2000: 44）。このような公共性としての空間を基礎に、「現代の読書会」ではときに出版社や著者、テレビ・新聞などのマスメディアと連動して、幅の広い展開がおこなわれている。したがって本稿としては、「現代の読書会」の分析を通じて、今日的な「文芸的公共性」のあり方をみることでできたという答えをもって、これまでの議論の結論とする。

参考文献

- 阿部 潔, 1998, 『公共圏とコミュニケーション——批判的研究の新たな地平』(MINERVA 社会学叢書) ミネルヴァ書房。
- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press Limited. (= 森田典正訳, 2001, 『リキッドモダニティ——液状化する社会』大月書店。)
- Escarpit, Robert, 1958, *Sociologie de la Litterature*, Paris: Presses Univrsitaires de France. (= 大塚幸男訳, 1959, 『文学の社会学』白水社。)
- Griswold, Wendy, 1993, “Recent Moves in the Sociology of Literature”, *Annual Review of Sociology*, 19: 455-67.
- Habermas, Jürgen, 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit——Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, München: Luchterhand. (= 細谷貞雄訳, 1973, 『公共性の構造転換』未来社。)
- 北条一浩・花谷美枝・高橋ちさ・村上陽一郎・前田勉・永江朗, 2015, 「読書会ブームが来た！」『週刊エコノミスト』49-52。

- 池上賢，2018，「マンガ：媒体と作品の多様化」高野光平・加島卓・飯田豊編『現代文化への社会学』北樹出版，79-88.
- 北田暁大・解体研編，2017，『社会にとって趣味とは何か——文学社会学の方法基準』河出ブックス.
- 前田愛，[1973] 2001，『近代読者の成立』岩波書店.
- 松下優一，2017，「訳者解説」『文学社会学とはなにか』世界思想社，192-215.
- 那須壽，1995，「A．シュッツにおける『現象学的文芸社会学』——ひとつの解説の試み」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第1分冊』41: 139-51.
- 齋藤純一，2000，『公共性』岩波書店.
- 齋藤孝，2002，『読書力』岩波書店.
- Sapiro, Gisele, 2014, *la Sociologie de la Littérature*, Paris: La Decouverte. (=鈴木智之・松下祐一訳，2017，『文学社会学とはなにか』世界思想社.)
- 佐藤健二，1987，『読書空間の近代——方法としての柳田國男』弘文堂.
- 竹内洋，2003，『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中央公論社.
- 筒井清忠，1995，『日本型「教養」の運命』岩波書店.
- 山本多津也，2019，『読書会入門——人が本で交わる場所』幻冬舎.
- 山梨あや，2001，「近代化と「読み」の変遷——読書を通じた自己形成の問題」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学心理学教育学』52: 71-84.
- ，2011，『近代日本における読書と社会教育——図書館を中心とした教育活動の成立と展開』法政大学出版局.
- 吉見俊哉，2003，『カルチュラル・ターン，文化の政治学へ』人文書院.
- 吉野ヒロ子，1996，「フィクションに対する態度——A・シュッツの文学分析への一考察」『社会学年誌』37，119-32.

